

第 49 回 2020 年 2 月 26 日 (水)

ゲスト 森達也 映画監督・作家・明治大学特任教授

テーマ 日本のジャーナリズムは機能しているか

～映画『i 新聞記者ドキュメント』は訴える～

主な内容

- ◎映画の主役は東京新聞社会部の望月衣塑子記者
- ◎「桜を見る会」の疑惑 「森友・加計」と同じ公文書管理の問題
- ◎『i 新聞記者ドキュメント』と劇映画『新聞記者』
- ◎キャリアバッグ引っ張る望月記者の素顔
- ◎『i 新聞記者ドキュメント』 報道の自由度トップクラスのフィンランドで試写
- ◎日本の記者クラブ制度は疲弊している
- ◎「記者 望月衣塑子」はなぜ注目されるのか
- ◎若者は今のメディアとどう接触しているか
- ◎テレビにジャーナリズム性があるか 新聞メディアは主張が明確
- ◎森監督の映像表現 『A』『A2』から何が変わったか
- ◎マジョリティーとは常に異なる視点で撮る 映画作りの原点
- ◎“メディアは自らの力に無自覚だ” 今のテレビ制作者に警告
- ◎質疑
 - ▽森監督の“好きなテレビ、嫌いなテレビ”
 - ▽地域密着メディアと大阪万博
 - ▽ポピュリズム、迎合、忖度と日本人
 - ▽日本の若者の保守化
 - ▽情報の津波の時代 ファクトチェックは可能か

森達也氏のプロフィール

森達也 1956年広島県生まれ

映画監督・作家・明治大学特任教授

主な著作

『放送禁止歌』（光文社・智恵の森文庫）、『僕のお父さんは東電社員です』（現代書館）、『死刑のある国ニッポン』（河出文庫）、『A3』（集英社インターナショナル）、長編小説作品『チャンキ』（新潮社）、『すべての戦争は自衛から始まる』（講談社文庫）など。

代表的な映像作品

ドキュメンタリー映画『A』（1998年劇場公開）。森監督の第一作。

映画『A』はオウム真理教の信者たちを、施設内にカメラを入れ長期間追跡し、その実態に迫った作品である。

撮影は地下鉄サリン事件（1995年）発生後の1996年から始まる。

森達也監督は自著『ニュースの深き欲望』（朝日出版、2018年）で、『A』の製作の経緯をこのように語っている。

「オウムはまだまだメディアにおいてはキラークンテンツだったし、施設内で自由に撮影ができる僕のポジションは、少なくともテレビ業界では他にいなかったはずだ。意義ある作品になるはずだとの自信があった。ところが撮影素材の一部を見せたプロデューサーやディレクターたちからは、これはテレビで放送は無理だよと制作協力は拒絶された」。

映画『A』はテレビでは放送されなかったが、海外ではベルリン国際映画祭などで上映され大きな反響を呼んだ。2001年には続編『A2』を公開、山形国際ドキュメンタリー映画祭で特別賞・市民賞を受賞している。

最新作としては、ゴーストライター騒動を起こした音楽家の佐村河内守氏を密着取材したドキュメンタリー映画『FAKE』（2016年）、そして（本日のテーマでもある）日本のジャーナリズムの現状を斬るドキュメンタリー作品、東京新聞の社会部記者 望月衣塑子氏を追跡した『i新聞記者ドキュメント』（2019年）が挙げられる。

<映画の主演は東京新聞社会部の望月衣塑子記者>

このドキュメンタリー映画の解説は、こんなキャッチコピーで始まる。

「官邸記者会見で鋭い質問を投げかける記者・望月衣塑子、なぜ彼女ばかりフューチャーされるのか？彼女は特別なのか？メディアの有り様に一石を投じる社会派ドキュメント」

カメラは望月記者の取材先を追っていく。
沖縄の辺野古基地建設問題で菅官房長官に執拗に食い下がる官邸記者会見の攻防。
性被害を訴える伊藤詩織さん、森友学園元理事長の籠池泰典・諒子夫妻らにインタビュー。
官邸周辺では、選挙の応援に向かう菅官房長官を、森監督のカメラが追う。ところが制服警官に（公道であるはずの）進路を何度も阻まれる。

朝日新聞編集委員 石飛徳樹氏の『i 新聞記者ドキュメント』評は（抜粋）

『i』が描くのは日本社会に広がる同調圧力だ。森監督はオウム真理教事件が転換点だったとみる。『あれ以来、人々のセキュリティー意識が過剰になった。不安を克服するために、同質の人間でまとまるのが一つの解になったんです』

森監督は、同じ方向に泳ぐ小魚の大群の映像を数回挿入する。日本人の明快なメタファー（暗喩）だ。

一方、望月記者は同調圧力をものともしない。自分が『違う』と思ったら、新聞社の上司にも思い切り逆らう。『彼女は他の記者と動きが違う。どこでも常に一人なんです。これは映画の鍵になると思いました』（朝日新聞大阪版夕刊、2019年11月22日付）

司会 新型コロナウイルスの関係でさまざまな催しが中止になり影響を受けています。ご存知の通りこの会も高齢者の集まりの典型であり、中止を考えなくもなかったんですが、今話題の映画『i 新聞記者ドキュメント』を製作された森達也監督にわざわざ大阪までお越しいただけるというチャンスはめったにないものですから、開催に踏み切りました。

ご紹介申し上げます。映画監督 森達也さんです（拍手）。

今日はこの映画を通して、かつて、そして現在も放送、新聞などジャーナリズムを生業としておられる皆さま方と一緒に「メディアのあり方、日本の現状」について考えてみたいと思います。

お手許には、森さんのプロフィールと共に森さんとお話したいこと、伺いたいことなど、これはわれわれ自身の問題でもありますので、10項目ほど挙げてみました。

さて、アンケートですが。挙手でお願いします。

森監督の『i 新聞記者ドキュメント』をご覧になった方、それから劇映画『新聞記者』をご覧になった方、両方をご覧になった方。（挙手）

ドキュメンタリーも劇映画も東京新聞の望月衣塑子記者を主人公にしている作品ですが、かなりの方が見ておられます。

私は、最初に大阪・十三の「第七劇場」で観たんですが、先週の日曜日に自宅近くの映画館でもう一度観ました。上映後、ある品のいい女性に「実は数日後に森監督にお目にかかってインタビューするんですよ」と話しかけたところ、顔がぼっとかがやき、うらやましいという表情をなさっていました。

そして「なぜこの映画をご覧になろうと思われたんですか」との問いには、「新聞に映画の紹介記事が割と大きく出ていたので、見に来たんです」。続けて安倍政権に関して尋ねると「国民は安倍さんにだまされているんですよ。あの人はだますのが上手ですからね」ということでした。肝心の望月記者のことは聞くのを忘れてしまいました。

昨今、新型コロナウイルス騒動で（安倍さんの）影が薄くなっておりませんが、先週末までは間違いなく、『首相の私物化が露呈』などと新聞に書きたてられていました。「桜を見る会」の問題というのはかなり煮詰まってきており、まず森さんにはこの話から伺っていきたいと思います。

今の安倍政権について、特に「桜を見る会」で追い詰められた感がありましたが、今の状況を森さんはどのように見ておられますか。

<「桜を見る会」の疑惑 「森友・加計」と同じ公文書管理の問題>

森監督 たかが予算数千万円でそんなに大騒ぎする必要がないんじゃないかということを書いている人がいる（ネット上）。ある意味で、そうなのかもしれませんが、この問題がはらんでいるのは、いわゆる公文書の管理のことなんです。

これは実は、森友問題であったり、加計問題であったり、もしかすると、もっとももっと以前から、表面化しないだけで、公文書がしっかり管理されていない、保存されていない、あるいは偽りのデータをもとに何かを決めていたのかもしれない、といったことが全部集約されているわけです。だから確かに、これは事件というのか、不祥事というのか、騒動としてはそれほど大きなものではないかもしれないが、その内側には民主主義、あるいは法治国家であるための条件、といったものに対する極めて脆弱な部分が垣間見えているんじゃないですか。明らかに露呈しちゃっているんで、やっぱりこれをこのままにして、次の話題にいきましょうということには絶対にできない（と思います）。多分、森友学園問題に比べたら、そう思う人が多いんじゃないですか。

だから、やっぱりメディアを含めてかなり政権に対して割と攻撃的な論調が多かったんだけど、コロナウイルス問題でなんとなく影が薄くなってしまっている。ただコロナウイルスはウイルスで別の問題（場当たりのとも見える政府の対応を野党追及）が露呈しているんですが。

何でもかんでも安倍反対というのは違うと思うんですが、「桜」については明らかに大きな疑惑があるわけですから。「桜を見る会」の疑惑、それこそ ANA インターナショナルコンチネンタルホテル東京、あるいはホテルニューオオタニも最近フリーのジャーナリストがいろいろ取材したら、実はそういったこと（領収書の有無など）は官邸に言っていませんといった情報はもうネットに出ているんですよ。こうしたことをもっとメディアはやるべきだし、新聞はもう少しバランスがいいとは思いますが、どちらかと言えば、テレビはコロナウイルス一色なんですね。「桜を見る会」は公文書の問題であり、民主主義、デモクラシーをどう担保するかという問題なので、一番影響力があるテレビが頑張っけて取り組んでほしいなと思います。

司会 森友とか加計の問題のときは何となくヌルヌル、ヌルヌルして逃げられている感じがしたんですが、今度の「桜」に関してはかなり危ないところまできているんじゃないかという気がします。あのままずっと週を越えて、コロナウイルスの問題がなければ、もっともっと追い詰めていたでしょうね。そのあたりは如何ですか。

森監督 今、国会はNHKが中継したり、しなかったりしますが、安倍首相が出席するときには必ず中継することになっています。だから首相が出席しないときは、国会中継はしないということになっているらしいんです。NHKなんだから首相がいなくても国会開催中はずっと毎日中継すべきで、お弁当の中身がどうこうという番組とか、「チョコちゃんに叱られる」なんかよりも、国会中継を優先すべきです。でもこれはNHKの人に聞いて分かったんですが、そうすると逆に抗議がくる。「なんで国会ばかりやっているんだ」と。公共放送はやっぱりむずかしいんですね。メディアはある意味、社会の合わせ鏡だし、社会が政治家を選んでいるわけで、根本的には国民主権なんです。そういう意味では日本は国民主権の国なんだから、国民のレベルはメディアと政治に反映されているという見方も十分できるんだなと思っています。

司会 安倍政権というのは、森友、加計問題でも決着がつかず、あいまいなままになっていて納得していない人が多くいる。一方、作品の中でも紹介されていましたが、選挙で街頭演説する安倍首相に、日の丸をふって応援する人もいますので、われわれが思っているほど、政権に対して不満をもっている人はいないのかもしれないね。

森監督 それはまさしく支持率に表れています。下がったとはいえ、まだ 40%前後でしょう。10人中4人は安倍政権を支持しているということになります。当たり前で

すが、一色になってしまったら怖いし、いろんな人がいるほうがいいんですが、この状況になっても、10人中4人が安倍政権を支持しているというのは不思議だなと思っています。

< 『i 新聞記者ドキュメント』 と劇映画『新聞記者』 >

司会 さて映画『i 新聞記者ドキュメント』の話に移りたいと思います。森さんはこの作品の前に公開された劇映画『新聞記者』のほうにも関わっておられるんですか。

森監督 正確に言うと最初、プロデューサーの河村光庸さんは、僕を劇映画のほうの監督にすると書いていたようです。彼は、望月衣塑子記者の著作「新聞記者」（角川新書、2017年）をモチーフにしてドラマ（劇映画）を撮るという発案をして、僕に監督どうだと依頼してきました。実は、僕は劇映画から始まっているんですよ。前作映画「FAKE」という作品を撮ってから2年経っていて、そろそろ劇映画をやりたいなと思っている時機でもあったので、OKして、シナリオ作りを始めていたんです。河村プロデューサーからドキュメンタリーとドラマの両方をやれないかという提案がその頃にあり、同じテーマで同じ監督がドラマとドキュメンタリーを作って、両方同時に発表するという世界初の試みだと彼は盛り上がっていたんです。しかしそんなことは不可能だと返答して、その後事情あってドラマのほうは降りたんです。そしてドラマ『新聞記者』は藤井道人監督にお願いしました。そういう経緯です。

司会 ドラマ（劇映画）の主演、新聞記者を演じたのは、恐らく在日3世の方だと思いますが、

森監督 シム・ウンギョンさんですか。彼女は在日ではなくて、韓国人です。

< キャリーバッグ引っ張る望月記者の素顔 >

司会 そうですか。ドキュメンタリーに話を戻しますが、『i 新聞記者ドキュメント』の主演である東京新聞記者 望月衣塑子さんは、最初から監督の頭の中にあっただ記者なんですか。

森監督 彼女とは5年くらい前、たまたま本の帯（内容紹介の文）を依頼されて、「武器輸出と日本企業」（角川新書、2016年）だったかな、読んでみて調査報道を見事にやっているなと思ったので、帯を書いたのです。そのときに一度お会いしています。彼女はよく食べて、よくしゃべり、かつそのよくしゃべった内容が本にも反映されていたので、彼女には興味をもっていました。そこに河村プロデューサーから、望

月記者で一本撮りたいという話があったので、やっぱりという感じでした。

司会 彼女の魅力はどんなところに。

森監督 映画を観てくれた人なら、だれでも分かるんですが。ほんとに、表・裏ないんですよ。僕もいろんな人を対象に撮ってきましたが、あそこまで表・裏のない人はいませんでしたね。映像に映ったあのままですよ。カメラを100%気にしない人は存在しないと思っていますが、彼女は例外ですね。“よくしゃべり、よく食べ、よく動き、よく笑う”そして果敢に立ち向かう。人にはいろんな部分があるんだけど、(彼女には)そういう陰が全くない。ドキュメンタリーの被写体としては面白くないですね。これまで僕が撮ってきたのは、例えばオウムの荒木浩さん(『A』を撮影していた当時、オウム真理教広報部副部長)、『FAKE』ではゴーストライター騒動を起こした音楽家の佐村河内守さんを撮りましたが、共通していることはみんな寡黙なんですよ。だから観客は(映像を観ながら)考えるんです。それとは対照的に、望月さんは沈黙してくれないんです。編集が大変でした。

司会 映像を見ていると、望月記者はいつもコロコロとキャリーバッグを引っ張って歩きますね。ずっと引っ張っていますか。

森監督 ずっと引っ張っています。

司会 あの中に何が入っているんでしょうねと一瞬思いました。

森監督 聞いたことがあって、一度見せてくれましたが、普通の書類とか、ノートパソコンとか、大したものじゃないんですよ。だったら別にキャリーバッグでなくてもいいかなと思うんですが。彼女はいったんこうだと決めたら、それを変えない人なので、多分キャリーバッグは常に持ち歩くということになっているんじゃないですか。

司会 いつでもどこへでも行けるようにという準備なのかなと思ったりしていました。

森監督 そんな周到なタイプじゃないですね。なんでいつも、これ持ってるのかと聞けば、“あれ、なんでかしら”と、そういうタイプです。

司会 随分、あっちこっち行きましたね。沖縄に行ったり、東北に行ったり、ずっと同行しましたか。

森監督 撮影期間は1年弱だったんですが、基本的には彼女のスケジュールを事前に聞いて、これは一緒に行ったほうが面白いんじゃないと思う取材先をこちらでピックアップして同行しました。
沖縄の新基地問題だけでなく、(性被害を訴える)ジャーナリストの伊藤詩織さん。大阪にも行きました。森友学園問題で籠池泰典元理事長、諒子夫妻にインタビューしました。そういうのは、絶対外したくないので同行取材しました。

司会 そして食べるシーンがたくさん出てきましたが、あえて撮っておられたんですか。

森監督 あえて撮るといふか、あえて編集するということでしょう。それはもちろん作為ですからね。何も考えずに編集するということはありません。意図は当然あるわけですが。実際によく食べる人なんです。
あれ(食べるシーン)を入れることで、いろいろ、それは考えましたが、僕なりの計算がありますのでね。
補足すると、作品を公開する前に一応試写を行います。ここに関係者を呼んだりするんですが、ドキュメンタリーの場合、一番懸念するのは、被写体なんです。被写体(作品に登場する人物)は作品を初めて観るんです。そこでいろいろ注文してきたりとか、愕然としてこんな違うと言って、騒動が結構あるんです。
望月さんが作品の試写を見終わった後、最初に何を言ってくるのか、こちら半分恐る恐るで……。すると彼女こちらを見て顔をしかめているので、どうしたんだろうと思ったら、「私はあんな食べ方してるんですか。夫と子供に見せられない」と半分ベソをかくような仕草で。それだけでした。あとは何も注文なかったですね。

司会 実においしそうに何度も食べていらっしまったので、ものすごく印象的でした。

森監督 肉食獣みたいですね。決しておとなしいタイプじゃないです。

< 『i 新聞記者ドキュメント』 報道の自由度トップクラスのフィンランドで試写 >

司会 そういった望月記者に密着取材しながら、あるいは彼女の周辺を見ながら、監督には何ができてきたんでしょうか。

森監督 作品を観た方の目に浮かんできたことと、僕の観たもののが一致するかどうかは分からない。基本的には映画って観た人のものになると思うんです。だから監督がどうこう言うなんて全く余計なお世話で、監督の言葉なんて、聞かなくていいんで

すよ。

ただ『i 新聞記者ドキュメント』に関連して面白い話があるんです。実は今年1月下旬から2月初めにかけてフィンランドに行ってきました。フィンランドの映画祭に招かれて『i 新聞記者ドキュメント』を公開してきたんです。

多分今日の会場の皆さんはご存知ですよ。国際ジャーナリスト組織「国境なき記者団」が毎年発表する報道の自由度ランキング、世界の国々の報道の自由度、まあこれはジャーナリズムが如何に機能しているか、成熟しているかという指標だと思います。日本がこれまで一番よかったのは民主党政権の時代ですね、11位までいっていたんです(2010年)。ところが安倍政権になってから、どんどん下落し昨年2019年は67位でした。72位(2017年)という時代もありました。

ニジェールとかマラウイ、マダガスカル(いずれもアフリカ)のほうが上なんです。日本のメディアというものが、今機能停止に陥っていると世界から思われている。当然指標のランキングで最下位は、まあ大体、北朝鮮、あるいはアフリカのエリトリア、独裁国家です。中華人民共和国も大体最下位から一つ上か二つ上ぐらいのところですよ。だから極めてまっとうだと思います。

【注】ランキング対象 180か国

これについてネットなどでは、ちゃんとして算定しているのかという声もあるが、世界中のメディア関係者が認めている指標なので間違いないと思います。

それではこのランキングで1位はどこか。ほぼ毎年ノルウェーかフィンランドなんです。つまり世界で最も報道の自由度が一番素晴らしいといわれている国の人たちに『i 新聞記者ドキュメント』を見せて、一体どんな反応をされるのか、ちょっと怖くなりました。毎回、映画を海外で公開するというのは、ある意味で自分の国の恥をさらすわけですね。でもそれはアカデミー賞受賞作品『パラサイト』(韓国映画)にだってある。韓国の人たちにしてみれば、出してほしくないところを出している可能性があるわけで、それは映画の宿命なんです。だから、緊張しました。特にドキュメンタリーはその要素が強いんです。

映画を上映し終えた後にももちろんQ&A(質疑)があったんですが、観に来てくれた観客の中にメディア関係者も何人かいて、その反応は基本的にはもう、ぼうぜんとした、絶句したという感じでした。彼ら、彼女らには“記者クラブ”といった存在が理解できないんですね。面白かったのはもう一つ、これはジェンダーをテーマにした映画でもあるのかと言われたことです。

(作品の中に登場する人物が)“男しかいない”と言うのです。記者の中にも、国会の中にも。

フィンランドでは首相(サンナ・マリ)が37歳の女性なんです。閣僚19人中12人だったかな、女性なんです。だから、男女同権どころじゃない、ジェンダーの問題は、とっくにほぼクリアされている。だからメディアもこれだけ十全に機能して

いる。社会がそれだけ成熟していると思うのです。

そういう見方をされたことは予想外ですが、確かにああいう景色は、彼らからすると異様に見えるんでしょう。

今日の会場でもそれに近い。皆さんは20年、30年前に現役だった方もたくさんいて、男性が多かったのは当たり前だったんです。だけど（フィンランドの現状をみると）日本も変わらなきゃいけないと同時に思いました。

先輩方を前にこんなことをあえて言うまでもないんですが、報道とか、メディアは何のためにあるのか（と問われれば）、小さな声、弱い人の声、か細い声を拾い上げ、すくい上げる、それをみんなに伝えること。もちろんこれも大事です。あるいは娯楽、エンタメ（エンターテインメント）も大事です。けどやっぱり、権力を監視する、これが一番の基本だと思うので、その部分がおろそかになったメディア・報道はほぼ意味がない。逆に言えば、その部分がおろそかになったからこそ、特にこの国は何度も失敗しているはずなので、また同じことを繰り返すんですかと言いたい。報道とは何なのか、ジャーナリズムは何のためにあるのか、ということを見ると、メディア関係者だけでなく、今や一般の人もただテレビを見る、新聞を読むだけでなく、SNSがあったり、自分で発信したりするわけですから、ある意味、1億3000万人全員がメディア化している状況であるわけです。一人ひとりがメディアに対して、ジャーナリズムに対して意識を持ってほしい。あとは映画を観た人が自分なりにモニタージュして、解釈してくれればいいと思います。

<日本の記者クラブ制度は疲弊している>

司会 官邸の記者会見では望月記者と官房長官の攻防が浮き彫りにされていましたが、ここに日本の記者クラブ制度の問題があります。森さんも、官房長官の記者会見場に何とか入ろうと（多方面から交渉して）努力されましたが、正式な会員（官邸の記者クラブ員）でないということで入れませんでした。森さんから見て、今の記者クラブ制度とか記者の置かれている状況をどのように思われますか。

森監督 記者クラブには、そもそも功罪があったはずなんです。功の部分は、つまりメディアが一つ一つのメディアだと、国家権力とか政治権力に対して、あまりにも脆弱すぎるので（立ち向かえない）。だからメディアがもっと連帯するという点では間違っていないと思います。

でも今この時代になって、その記者クラブ的なものがむしろ新たな要素を入れようとしなくて、あるいは自分たちの既得権益を守ることに軸足がいつの間にか移っている、そうした状況に、そういった組織になっているのであれば、それは弊害でしかない。

僕は記者クラブについては完全になくさない（という立場をとります）。それは

功罪の功があったはずなので、やっぱり映画の中でも登場する外国人記者クラブの記者の方が自分たちは一人ひとりがインディペンデントの存在で、ジャーナリストであって、会社に所属しているが、会社員でないんだということを語っていましたね。やっぱり、ヨーロッパ、アメリカの人は個が強いんだと思います。僕たち日本人は個が弱いんです。なかなかそうしたことになれない。であれば、メディアだけでもしっかり連帯しようとするのは間違いない。というよりも、制度的に疲弊してしまって、弊害になっている。だから（記者クラブの有り様を）変えるべきです。なくするのではなくて、改善すべきだと思います。だから僕をそこに入れてくれれば、少しは変わるかもしれないのに、結局（記者クラブには）入れてくれなかった。

（映画の中に）メディア全般にそうした排他的な部分がとても強くなっていることは感じるので、僕の要素を入れました。つまり望月記者プラス森達也（監督）もここ（記者クラブ）から阻害される、排除されるという文脈を加えれば、よりその辺が明確になるのかなと考えたんです。

【注】社会部の望月記者は定例の官邸記者会見では質問制限を受けている。

司会 そういう意味で印象的だったのは、国会議事堂前の映像です。警官がいっぱい出て来て、カメラを持っている森さんを通せん坊しましたね。ほかの人が普通に歩いているのに森さんだけが歩けないというのはおかしいと思います。私だったらカッコして、怒りだしていただろうと思うんですが、ずい分、おだやかに話をしておられましたね。

森監督 カメラが回っていますからね。僕が怒っちゃうと……。計算しながら（カメラを）回しています。ただ警官一人ひとりはいみんないい人なんです。実は一番最初、官邸の前でちょっとあっちに行ってくれと言われた後に望月さんが出て来て、僕たちに「こっちに来ないでください、車が通りますから」と言いながら、ほかの人をどんどん通しているシーンがありました。

【注】森監督のカメラは、路上を歩く菅官房長官をねらっているが近づけない。

あの制服二人組が僕らを通せん坊しているんですが、その直前に背広の人が目くばせしながら耳打ちしていました。「制服」組は明らかに「背広」からわれわれを通すなど言われているんですよ。公安なのか、官邸警備の警官なのか、恐らくその「背広」はエライ人なんでしょう、「制服」組はその指示に従わざるをえない。だから困ったな、理不尽だなと思いながら、ちょっと通らないでくださいと言っているんでしょうね。一般の人が公道を歩くことをなぜ制限されなきゃいけないのか、

どう考えてもおかしい、官邸の誰かがあれ（映画のシーン）を見て、少しは（警備も）変わってくればいいなと思っています。

<「記者 望月衣塑子」はなぜ注目されるのか>

司会 映画『i 新聞記者ドキュメント』の解説に「官邸記者会見で鋭い質問を投げかける記者・望月衣塑子 なぜ彼女ばかりフィーチャーされるのか？」という件くだりがありますが、森さんは記者望月さんをどのように見ておられますか。

森監督 望月さんが記者としてパーフェクトな存在かという、そうではないと僕は思います。結構抜けているところもあるし、質問もまあベストとは言えない。ちょっと長い。ある意味、前提の置き方が下手なんです。インタビューしながら、無駄な相づちが多すぎる、ダメなところがたくさんあります。でもその彼女が、なんでこんなに注目されるのか、僕の映画だけでなく、その前から随分注目されています。やっぱり周りの記者とは動きが違うからだと思います。じゃ一体何がどう違うのか。彼女は単なる変わり者なのか、多分そうじゃないんだろというところは、僕の映画を観て、考えてほしいところでした。まあひと言で言っちゃうと、彼女は周りをあまり気にしない、“KY”という言葉、前川喜平さん（元文科省事務次官）は彼女に対して言っていました、まさしくそうだと思います。でもだからこそ、出来ることがある。先ほど言いましたが、日本社会というのは、組織があまりにも強すぎるので、“個”がみんな埋没してしまっている。記者ではなくて、会社員になっている。そういうときに、“KY”という属性を持つ人は他の記者が出来ないことが出来る。もし会社員であれば、会社の利益だとか、ガバナンス（統治）だとかが前面に来るんでしょうが、彼女はそういったことをあまり考えないから、このスクープをちゃんと世に出したい、この権力のこの不正を私がみんなに訴えたい、という気持ちが強い、それでがむしゃらになっちゃうタイプなのであれだけ浮いちゃうわけですね。でもそもそも、メディアって何なの、と僕は問いかけたい。みんなが望月さんのようなになれば、どこの会社でも大変なことになります。もう少し増えてもいいのではないのでしょうか。さらに補足すれば、当然皆さまご存知のように、政治部と社会部には違いがあるわけです。政治部の文化もありますし、官邸記者クラブは政治部主導ですから、そこに社会部の彼女が入ってくるというのは、政治部の記者からみれば、ルール違反だと（言うでしょう）。政治部というのはどちらかと言えば、（官邸側に）取り入ってうまく言質をとり、本音を引き出すのが自分たちの信条だという言い方をするんですが、じゃここ数年、政治部の記事で本音を暴いたことがあるかという、まずないじゃないですか。（会見では）その場で聞いたことすべてを記事にしない、記事にしたら刺されるか

ら。それなら取り入る意味がない、むしろ正面からどんどんやるべしだし、僕は政治部的なスタイル、番記者という制度、このあたりを変えるべきではないかと思っています。

【注】番記者とは

特定の政治家などの担当として、常にそばにいて取材する記者（広辞苑）

司会 もしも森さんが官房長官の会見に出て、質問が許されるとしたら、何を聞いたかったですか。

森監督 望月さんが質問するときの様子は、当然ながら撮れていない、ほかの記者たちの顔も撮りたかったんですよ。でも途中から、もう（記者会見場）に入れなくていいや、とだんだんそんな気になってきました。会見場に入れなことを撮るといふことのほうが大事だと思うようになりました。会見場に入ることが許され、質問できるのであれば、取材方針を変えてもいいと思っていましたが、結局（官房長官の定例会見には）最後まで入れませんでした。会見場に入ることが許されたら、いろいろ撮ることがありましたが、それは逆に不可欠なものではないと思うようになってきました。

<若者は今のメディアとどう接触しているか>

司会 今の若い世代は、既存のメディアに対する接触度が低くなってきていますが、大学でも教えておられる森さんは、若者のメディア観をどう見ていますか。

森監督 大学で若い人たちと接して感じることは、メディアに対する落胆とか失望みたいなちゃんとしたものは持っていない。彼らは勉強していない。むしろネットを見ながら、バラエティー番組のやらせなどを見ただけでメディアを信用できないとか言っているレベルが多いようです。全部とは言いませんが、メディアを批判するというより、ネットを一番重要視してしまう。これは悪い傾向だと思います。若い人だけでなく、大人の中にも多いのは保守的な思想を持つ人が、今のメディアは全部左側だというような、サンケイ、読売は別にすれば、そうした意識を持つ人が結構いるんでしょうね。

本来、メディアというのはある意味での反権力の姿勢にいなきやいけない存在のはずなので、僕は民主党政権時代にはメディアは結構がまんやっただと思います。でも日本は、戦後ずっと自民党ですから、常にメディアというのは反権力にいるという意識を持つ人は多分一定数いるんでしょうね。今の自民党を支持する層とかなり重なっていると思います。

司会 話題が変わりますが、東海テレビが製作し劇場公開された『さよならテレビ』に関してどんなふうにご覧になりましたか。(森さんのコメント)

「あなたがもし業界人なら、この映画を見て居心地の悪い思いをするはず。もし業界人でないのなら、自分たちと何も変わらないテレビ業界人の喜怒哀楽について思い切り胸をうたれるはずだ」というふうに書いておられます。

森監督 映画のコメントなんか適当なことを書いていますから、あまり深く考えないのですが、好きな作品です。

ただ面白いのは、ある映像コンクールの審査のとき、結構、賛否両論があったことです。とくに業界の人ほど、あれはよかったと言う人と、あれは許せんと言う人とかなりくっきり分かれる、というのは逆に面白い現象だなと思いました。プロデューサーの阿武野勝彦さんは、したたかなんでその辺りを見越しているんじゃないかという気がします。いずれにしても、コメントにあったようにテレビ局の局員だって、悩んだり、傷ついたり、すぐ怒ったりとか、そういう人がたくさんいるわけです。その人たちが番組を作っている。そしてジャーナリズムを構成する人たちなんだということを、改めて観て、気づいてほしい。

やっぱりディレクターの土方宏史さん(「ヤクザと憲法」など製作)は結構、ピンマイクの仕掛けをばらしたりとか、あのあたりはやったなという感じで、ニヤニヤしながら観ていました。なにか、配給会社の人から聞いたんだけど、一般のお客さんの中には“全部やらせだったのね”と怒って帰る人がいたとか。それはちょっと違うんだけど、表現って難しいな。どっちにしてもいろんな賛否の分かれる作品。だけど、間違いなく、凡作でないことは確かだという評価です。

【注】『さよならテレビ』

「テレビ局の記者が自らの局にカメラを入れ、報道現場を赤裸々に映し出したドキュメンタリー映画」と紹介された作品(毎日新聞夕刊、2020年1月8日)

司会 私は大阪・十三の第七劇場で観たんですが、封切りの日で満員でした。非常に居心地の悪い思いをしながら観ていました。やっぱり(制作スタッフは)かなりの勇気がいったんだろうなと思っています。いずれにしても、よくぞ作ったという感じはありますね。

司会 ところで、今の放送人の有り様についてどんな思いを持っておられますか。なかなか、よくやっているじゃないか、それとも、何か物足りないなと思っておられるのか、かつてテレビで仕事をずっとやっておられましたね。

森監督 両方ありますね、どちらかじゃないです。2年前、テレビ東京でドラマを1本制作

しましたが、別に（テレビと）完全に縁を切ったわけではないんです。基本的には今テレビはどちらかと言えば、僕の仕事というより、テレビを“見る”、視聴者として接していますが、番組によっては、「よくやったな」というときもあれば、「これはなんだ」というときもある。ケースバイケースですね。しかし少なくとも、テレビは影響力としては最大ですからね。

学生 100 人に聞くと、

新聞を毎日読む人 6～7人

本を定期的に読んでいる人 3～4人

テレビを毎日見ている人 4～5人いるかどうかですね

それでは情報を何から得るか聞けばもちろんスマホで情報を得ているんですが、そのスマホのネットニュースの半分以上は新聞かテレビの情報をニュースソースにしているわけです。

そういう意味ではやっぱり新聞も含めてメディアの影響力は大きいし、大事な存在になっています。だから（新聞もテレビも）ダメになったら困るし、そういう思いで業界の人とは接しています（知り合いの人、たくさんいますので）。

【注】＜メディアの信頼度調査＞

（公益財団法人「新聞通信調査会」2019年11月1日発表）

信頼度は100点満点	①新聞	68・9
	②NHKテレビ	68・5
	③民放テレビ	62・9
	④ラジオ	56・2
	⑤インターネット	48・6

「2008年度の調査開始以来、初めて信頼度で新聞が1位になった」

（朝日新聞2019年11月2日付）

＜テレビにジャーナリズム性があるか 新聞メディアは主張が明確＞

司会 今回、映画『i 新聞記者ドキュメント』を観て思ったのは、新聞というのは、その社の主張、それから個人の主張も含めて、言いたいことを強く打ち出しているということ。それに比べて、テレビは言いたいことを言っているんだろうかという疑問が常に残ります。

森監督 釈迦に説法かもしれませんが、例えば新聞は、東京では、読売、朝日、毎日、東京新聞、そして日経、産経があります。それぞれ非常にカラーがはっきりしていて、読売・産経は政権与党支持、朝日、毎日は反対ですね。東京新聞もそうかもしれませんが。日経はその間にいるが、どちらかと言えば、政権寄りなのか。記事によって

変わったりします。新聞は政権だけでなく、いろんな分野、例えば原発や沖縄基地問題といった、テーマによって、自分たちの主張をはっきり打ち出している気がします。

テレビは(主張を)打ち出さない。これも東京ではフジテレビ、日本テレビ、TBS、テレビ朝日、テレビ東京、そしてNHK。各々、多少の違いはあるけれど、新聞ほどの違いはないと思いますよ。

この理由は明らかで、新聞はマーケットが固定されているからなんです。つまり、朝日を購読している人は朝日の記事を読みますが、テレビの場合は、みんなリモコンでチャンネルを変えますから、マーケットが固定していないわけです。従って朝日の場合は朝日の読者が喜ぶ紙面づくりをします。産経の場合、産経の読者が喜ぶ紙面づくりをします。どんどん先鋭化するわけです。

しかしテレビの場合、そうすると逆にパイを小さくしてしまうので、万人に受けるようにしないといけない。ということで結果的には自分たちのスタンスであったり、思想、信条的なものであったり、あるいはメッセージを先鋭化できない、つまり誰にも受け入れられるようにしかできなくなってしまっている、多分これが日本のテレビの現状だと思います。

例えば欧米の新聞は、あまり宅配はなく、基本的には駅で買うので、新聞ははっきり色合いを出しますが、テレビも出しますよ。放送局によってはもう少し鮮明な部分が出てきているはずだし 大統領選挙の前になったら著名人とか、ロックミュージシャン、アスリートが当たり前のようにテレビで、俺はトランプを支持するとか、私はヒラリーをとか普通に言いますからね。

日本でそんなことを言うと、CM出演を干されてしまう。なぜそれを言ったらダメなのか、訳が分からないんですが、そういったものが悪い意味でテレビに反映されてしまっているという気がします。

<森監督の映像表現 『A』『A2』から何が変わったか>

司会 今のお話を伺っていて、『i 新聞記者ドキュメント』のラストシーンをふと思い出しました。小文字で「i」と出てきまして、これがあの監督がおっしゃっていることと相通じることなんですか。

森監督 そこはお任せします。一応公式な見解は、僕の映画のタイトルは、これまで『A』『A2』『FAKE』『3 1 1』、全部アルファベットと数字だけなんです。だから今回ちょっと違うものにしようかなと思ったんです。最初、(衣塑子)「イソコが来た」というタイトルにしようかと思ったんですが、スタッフ全員から反対され、それは引き下げました。だから結局、これまでと同じように ^{かしらもじ} 頭文字 にしようかと思い、

「望

月衣塑子」で「i」としたのが、公式見解で、あとは観る側のみなさんが考えてくださいということです。

あとは賛否両論ですが、その前のアニメーションのシーンも含めて賛否両論でしたね。

司会 あのアニメも結構面白かったんですが。

森監督 人によってはいらぬと言う人がいますが。(僕は)絶対入れたかったんです。これまで『A』とか『A2』『FAKE』とかでは、ダイレクトシネマといって、余計な音楽も、テロップも入れない、ナレーションも、もちろん付けない、ただじっと撮るみたいなスタイルのように思われていますが、僕もテレビ出身ですからさんざん昔はいろんなスタイルの番組を作っていたし、そのテーマによっては、(表現方法は)変わっていいんだと思っていました。ちょっと自分の手法にあきてきたというところがあるので、今回編集する前から、アニメをどこかで使うからとスタッフには宣言していました。

【注】ダイレクト・シネマ

ナレーション、音楽を入れず、事実をそのまま映像に記録し伝える。

1960年代、アメリカに始まったドキュメンタリー映画の一つの形式。

司会 それにもう一つ、音楽は、騒々しかったが、楽しかったですね。

森監督 楽しい、騒々しかったですか。

司会 いやいや、これまでのトーンとは違って、オツという感じがしましたね。日本、東南アジアというよりは、南米みたいなトーンだと思いました。

森監督 ちょっとカーニバル的な音楽。これは『A』という作品でBGMに使っています。テレビの場合、悲しいときには悲しい音楽、楽しいときには楽しい音楽を流しているようですが、それは使い方が間違っていると思うんです。むしろ、深刻な場面で明るい曲を付けると、観る側が絶対疑問をもって、より作品のほうに踏み出すきっかけとなる。そういう効果を及ぼす場合がある。音楽を単に補助的に使うのではなくて、ときにはぶつけあうとか、ミスマッチみたいなものもありかなと思います。日本のテレビ関係者、制作者がそこまで考えていないのはもったいないかと常々思っていましたから『i 新聞記者ドキュメント』についても(音楽にアクセントを付けるという)角度から選曲をしています。

司会 『A』とか『A2』とか『FAKE』とか、何本か映画の話が出てきました。これらはみんな映画館でしか上映していないんですね。

森監督 『FAKE』、あれはテレビでは放送できません。テレビ関係者であれば、本当は「i」よりは「FAKE」のほうがより刺さる内容になっています。テレビ局の人が出てきますから。ゴーストライター騒動を起こした音楽家の佐村河内守氏を描いた作品です。

司会 こういった映画を通して、おっしゃりたいことは何ですか。

森監督 それは、みなさんが自由に考えてください。映画を観たうえでいろいろ解釈をしていただければと思います。

<マジョリティーとは常に異なる視点で撮る 映画作りの原点>

司会 森さんの著書『ニュースの深き欲望』（朝日新書、2018年）を読ませていただきました。この中に「日本について考えたいのなら、外国から見る視点が絶対に有効だ」という^{くだり}件があります。そこでお尋ねします。これからの日本、日本人はどこへ行くんでしょうか。

森監督 先ほどちょっと触れましたが、以前テレビの仕事をしていました。テレビのディレクターでした。テレビのディレクターを辞めた理由は、僕が最初に作った映画『A』というオウム真理教の施設内にカメラを入れて長期間追跡し、その実態に迫った作品、このドキュメンタリーを撮る過程で、いろいろ経緯があって、制作会社を辞めることになります。結果として撮り続けていました。取材していたのは1995年～1996年だから、メディアはものすごくスクラム状態ですね。でも（その時）自分はメディア側の人間じゃないんです。僕はオウム側の了解をもらっていますので、一人でデジタルカメラを持って、境界を越えて自由に（オウムの施設の）中に入っていきます。撮影しながら、振り返ると、ほかのメディアの人間は不思議そうに僕を見ているんです。僕はメディアの人間じゃない。オウムの人間かというと、オウムでもない。一般市民かかというと、市民でもない。周りを機動隊に取り囲まれている。もちろん（僕は）権力の側でもない。一体自分は何なんだろうと。そこがスタート地点なんです。結果、僕は一人になったんです。それまではある意味、会社員でした。制作会社の社員とか、いろんな組織に所属しながら生きてきました。オウムを撮ることで、もしかしたら自分は、日本社会から排除されるかもしれない。

そのような恐怖感もありましたが、一人になったことによって、いろいろ考えることもありましたし、見えてきたものもたくさんありました。要するに視点を変えるということなんですね。だから、人がたくさんいれば、そのたくさんの人の視線というのが、ある意味でのマジョリティーになっていく。当然のことながら、その中で、それとは異なった視点を定めれば、全然違うものが見えてくる。日本社会は、このところ、違うところからモノを見ようとする人があまり出てこない。みんな、同じ位置から、同じような見方をする。メディアもそうですが、本来であれば、例えばオウム真理教に対して、もっともっと違う見方ができたのに、どこもやらなかったから、僕の映画が残ったわけですよ。たいした映画じゃないんです。『A』や『A2』に価値があるとしたら、それはオウムに対して違う見方をしているという点においてです。

本来ならば、メディアがやるべきことをやっていないから、僕の映画がたまたま残っただけです。だからそういう意味では視点を変えるということを常に意識しているし、海外に行ったら、これはもう強圧的に視点を変えざるを得ないのですから。海外だけじゃない、例え海外に行かなくても、この大阪にいても、東京にいても、視点を変える方法はいくらでもある。簡単なことですよ。

ちょっとかがめば違うものが見えてくるし、ちょっとみんなと違うところへ回り込めば、違う風景が見えてくる。それだけのことなんです、それをみんながしなくなってしまうというのは、社会にとって非常にまずいことだと思います。

メディアは本来そこをやるべきなんで、その意味で機能できていないんですね。じゃこのままだと、日本はどうなるのか。うーん、戦争がまた起きるという見方をする人もいるし、それも一概に否定できないけれど、特に市民集会なんかでは“軍靴の響きがまた聞こえてきました。灯火管制の時代が始まります”と言う人がいます。いや灯火管制はもうないでしょう。つまり、かつての戦争なんかは、いくらなんでも始まりっこないと思います。でも、戦争はじわじわと僕らの日常に入り込んできます。ある意味僕たちは、イラク戦争とかには協力しているわけですから、もうどこかで戦争に加担していることになっているわけです。

これは吉岡忍さん（ノンフィクション作家）が言っていたんですが「今の戦争というのは六本木でイタ飯食いながら、家でも大きなテレビでリオのカーニバルを見ながら、戦争って始まるんだよ」と。

まさしくそういう時代になっているんだろう。僕たちは、そういう状況になってしまっていると考えていいんじゃないかと思います。

< “メディアは自らの力に無自覚だ” 今のテレビ制作者に警告 >

司会 ここに集まっている方はほとんどOB・OGの方なんですが、現役の放送人にどんなことを言いたいですか。

先ほど紹介した著書『ニュースの深き欲望』の中で、森さんはこう記しています。

「人は一人称単数の主語を失うと同時にこの前提を忘れる。自分はアプリアリに公平中立で客観的なのだと、いつのまにか思い込んでしまう。

この瞬間に正義が発動する。

こうしてメディアは権力を自らのうちに充填する。悪を挫き弱きを助けることを金科玉条にする居丈高な権力だ。」(後略)

そして、森さんは「メディアは、自らの力に無自覚だ」と警告している。

これを読みながら、自分もそんなふうに思っていたのかもしれないと思わされてしまいました。

森監督 ドキュメンタリーを作っている報道系、あるいは制作系のバラエティー番組を制作している人も同じかな、大切なことはうしろめたさにあると思っています。テレビという仕事をやる上で、誰かを傷つける可能性が常にあるんです。ある意味で、とんでもない仕事をやっている。つまり何気ないちょっとしたひと言を放送しただけで、もしかしたら誰かを傷つけ、追い詰めている可能性が常にあるわけで、考えたら人間関係ってそうでしょう。ふだんしゃべっていたって、思わず傷つけてしまったりすることがあるわけで、テレビはそれを拡大、増幅するわけですから。それは常にあるわけです。それに対してすごく自覚が無さすぎる。その自覚の無さが、さきほど読みあげてくれましたが、正義になっちゃう、正義になったらダメだと思う。

メディアは絶対正義じゃない。(メディアは)懲罰機関じゃないです。報道することで懲罰を与えてしまう。実際に与えてしまっているんですよ。正義になっちゃいけないんです。情報機関ですから。

でも情報を発信するということでは、人を傷つける可能性がある。日々人を傷つけているわけで、傷つけるけれど、これは伝えなければいけないんだと価値あることをやっているんだというぎりぎりの、なんか矜持と言えいいのか、それが大事だと思うんです。だから決して胸を張ってはいけません。昔はこういう仕事をしている人は、自分たちのことを“ブンヤ”とか“テレビ屋”と称していましたが、それくらいが丁度よくて、まっとうなんじゃないでしょうか。

とは言うものの、これは同時に大事な仕事でもあるんです。今、世界で何が起きているのか、今、日本で誰が苦痛の声を挙げているのか、それを伝えなければいけない。あるいは、権力がこんなところであぐらをかいて毎日、鉄板焼きを食べているとか。そういうことも含めて伝えなければいけない、やっぱり大事な仕事なんです。

僕、少し矛盾したことと言ってますね。胸張ってほしいんだけど、胸張っちゃダメよと。そういう非常に微妙なポジションにある仕事だけれど、その仕事をやってきた、今もやっています。頑張ってください。僕も頑張ります。

司会 ありがとうございます。私の最後の質問です。そのあと皆さんからの質問をお受けします。

森監督がこれからなさりたいことは何なのでしょう。

森監督 次はドラマを撮ります。もうドキュメンタリーは十分撮ったので、今からちょっとやりたいことがあって、これからその準備を始めます。具体的には、再来年ぐらい、何か（ドラマを）1本撮りたいですね。

司会 どんな系統のドラマですか。

森監督 まあ、歴史ものを考えています。そんな古いものじゃないんです。100年ぐらい前の話。それをモチーフにしたドラマを考えています。

司会 期待しています。それでどんな（笑い）？

森監督 関東大震災のときの朝鮮人虐殺です。ハリウッドだったら、もう3~4本の映画が出来ていますよ。日本では1本もない。それをぜひ映画にしたいと思っています。

<質疑>

司会 会場の方からどうぞ質問をお受けしたいと思います。

出席者 森さんにお伺いします。今、テレビを一視聴者として見ている旨のお話がありましたが、一番好きなテレビとか、嫌いなテレビとかがあればお聞かせください。

森監督 好きなのは、「ダーウィンが来た」で、毎週、録画して見えています。動物系が好きなんです。BS・NHKで放送している「ワイルドライフ」とか。あの辺、大体録画しています。

「チョコちゃんに叱られる」も、一時、はまりました。NHKばかりですね。嫌いなテレビはみなさんも実感されていると思うんですが、年齢を重ねると、バラエティー系の番組の、特に音のうるささには耐えられなくなりました。テレビって、足し算するんですよ。音をのせる、テロップを入れる、ワイプで出席者を映し出す、ナレーションを入れる とにかく何でもかんでも（画面に）のせていくでしょう。

もううるさくてしょうがない。引き算すればいいのに、多分不安なんでしょう。でも表現というのは、本当は引き算すべきなんです。引き算して考えさせる、映画はそれができるけれど、テレビはそれができないから、何でもかんでも足し算して、結果的には無茶苦茶うるさくなっている。結果的には自分で自分の首を絞めているようなものです。バラエティーでも面白いものは面白いんでしょうが、最近ちょっと耐えられない感じですね

出席者 大阪万博というのがあるんですが、(森監督から質問“それは昔の----”) いやこれから開催される万博のことなんです。

なぜこんなことを聞くのかといいますと、放送局にとって地域密着は一つの使命です。地域密着メディアの有り様というのは、僕も岡山の放送局にいたことがありまして、そういうところは特に、地域おこしみたいなことに尽力せよというのが一つの命題でもあるんです。そうすると、大阪の民放局、NHKもそうだと思いますが、大阪万博に対する批判的な報道はいっさいない。大政翼賛会的にならざるをえない。なぜかと言えば、地域おこしということに対して、とやかく言うなという話になっていくんです。地域メディアの有り様って、その辺りがものすごく難しいです。そこで率直に「大阪万博」(2025年開催)について、どのようなお考えをお持ちかお尋ねします。

森監督 東京に暮らしていると、今質問されて、一瞬、もう40何年か前の「大阪万博」のことかなと、そう、またやるんだっけと思い出しました。とにかくこれからやる「大阪万博」に関する情報はあまりないですね。大阪万博がそんなに必要かなと思うんですが、オリンピックと何か相関関係があるんですか。東京オリンピックも考えたらそうなんですが。地域おこしをするうえで、メディアというのはとても重要な位置にあるというのは分かるんですが、だからといって、批判したり、逆らったりしてはいけないといったタブーを作っては駄目。まさしく、今、東京オリンピックがどうなるかということで、結構、世界からこの国で大丈夫かという批判がきているんです。これは、単純にコロナウイルスがこれだけ蔓延して大丈夫かなではなくて、その対応の仕方なんです。今この状況で7月に行えるかどうかの可能性について冷静な見解を数字で示せばいいのに(提示できていない)。最近オリンピック委員会が出したのは、一丸となって頑張りましょう、何かもう精神で乗り切るみたいなものですね。大昔にも、大失敗したのに、また同じことをやっちゃっている。そういう意味ではオリンピックに対しても、どんどん批判すべきは批判したほうがいい。

大阪万博でそれをやると、視聴者から抗議がくるのは分かりますが、だからとて、全部、大政翼賛会的になってしまうのはまずい。そう腹を据えたほうがいい

という気がします

外部の人間だから気軽に言えるのかもしれませんが。内部の人は、そんな簡単なことじゃないと頭をかかえているのは分かりますが、そういう気概を持ってほしいと思います。

出席者 昨日、映画『i 新聞記者ドキュメント』を観てきました。面白かったです。お尋ねしたいことがあります。映画の最後のところ、これまでの作品では決して自分でものを語ったりはされなかった。ダイレクト・シネマを継承するフレデリック・ワイズマン（アメリカ）のようにナレーションを排除し、映像で語らせる手法をとっておられました。でも今回は最後に、「憲法 9 条を守る 俺は原発反対だ」というふうなことを、ちょっと厳しい言い方をすれば、説教臭いことを言われたなと思ったんですが。何か変わられたんですか。主観的とは何回もおっしゃっていたし、ドキュメンタリーは主観だとも。そういうことを直接語るということは、今までの森さんとは違うなと思ったんです。どうなんでしょうか。

森監督 先ほども言いましたが、半分自分の手法に飽きているんで、何か違うことをやりたいと思っていた。おっしゃるように、テレビはリモコン片手に見えていますから、多分テレビでは出来ないんだけど、映画で出来ることは、映画館の場合、観客が 1800 円（入場料）払って座っちゃうと、こっちのもんですからね。めったに途中で席を立たないので、じっくりこちらの言いたいことをそれも最善の方法で伝えられる。最善の方法とは何かと言えば、間接話法なんです。世界の悲惨な光景を見せながら「世界を平和にしましょう」というようなコメントを入れるなんて、こんなつまらないことはないわけです。観る側に考えてもらう伝え方、それで（観客を）獲得するというのが一番強いんですよ。テレビはそれをさせない、ただぼーと見ているだけで受け取る、受容するだけ。しかし映画はそうじゃない。観る人が自分で考えてほしい、解釈してほしい。これまでそういうつもりで作ってきたんです。本当は、ナレーションは要らないというスタンスの自分に飽きてきたというのがあります。あと指摘されたナレーションの部分、つまり

沖縄に基地はいらない 原発も要らない、憲法 9 条守るべき
というところで、僕はひっくり返しているんです。補足しますと、このナレーションの中に、そんなことはどうでもいいんだと、今大事なことは自分でこんなふうに集団の中に埋没することじゃないんだと言いたいのです。あそこのナレーションの部分は、そこのところを露骨に言わない、つまり、直接話法にみせかけながら、その実、間接話法を使っているんです。
この手法は自分の中ではぎりぎりセーフかなと思うんですが、先ほども言ったよ

うに賛否両論があつて、多分“森、ちょっとやりすぎ”と思われても、それはそれで、いいんです。

司会 ひとつ大事なことをお伺いするのを忘れていました。森さんは次のことについて、どのようなお考えですか。

今の日本の現状をポピュリズム、迎合、忖度と言っているのかどうか分かりませんが、日本人って、何時頃から、何をきっかけに、こういう現状肯定して、そして何となく、ずるずるいつてしまう国民になってしまったのかなということを考えているんですが。

森監督 ポピュリズムというのは、究極的にはデモクラシーだから、全部が全部悪いことではないのではないかと。日本人が、何時頃から現状維持みたいな属性を持つてしまったのかというと、僕は、現状維持というよりは、むしろ集団ということのほうが問題なんだと思います。

つまり、マジョリティーが自分を群れの中にひき寄せるわけで、これは日本人だけではない、みんなそうですよ、だって群れることは本能ですから、社会性ですから、それがあからこそ、人類は言葉を発明して、文明を持って、今地球上では一番優先順位というか、ヒエラルキーが高い位置にいるわけですよ。

人類はもう一つあつて、馴致^{じゅんち}能力が極めて高いのですね。馴致^{じゅんち}というのは慣れる

こ

とで、熱帯雨林のジャングルにも住んでいるし、北極にも住んでいます。もちろん衣食住はあるんでしょうが、ひとつの種で、こんなに広範に棲息できる生きものはほかにないはずですよ。自分を合わせる能力が強いんです。言い換えると、日本人は集団の中に自分を合わせる、自分の価値基準はともかくとして、周りの意見に自分を従わせるみたいな能力がとても強いんです。

これは、善し悪しです。“和を以て貴しとなす” 集団の中でみんなと一緒に動くのは、美德でもあるけれど、悪い部分がどんどん出てきてしまう。つまり、自分では考えなくて、集団の指示に従う。集団は集団で強いリーダーが欲しくなる。集団化という現象は世界中で起きていて、ヨーロッパなんかは極右政党がどんどん力を増す。そして独裁的な指導者も支持を集めている。

トランプ（アメリカ大統領）、プーチン（ロシア大統領）、シー・チンピン習近平（中国・国家主席）、ドゥテルテ（フィリピン大統領）、エルドアン（トルコ大統領）。こういった強いリーダーをみんなが求め始めている。

つまり世界全体が集団化している。集団というのは分断化でもあるんですよ。

集団は同じ人たちでまとまりたいと思うわけです。違うものを入れたくない。排斥したい。だから移民なんか入れたくない。ヨーロッパではまさしくそういう現象が

起きているわけです。日本でも昔から、今世界で起きているこういった現象の傾向が強かったんじゃないですか。明治以降、そういう国になってしまっている。自分よりも集団、そして国家、お上、日本の場合は、天皇制というのもあって、独特の属性を持っている。

特に中国や韓国とは違うメンタリティーがあって。研究対象としては非常に面白い民族だと思います。

自分も日本民族ですから、その意味では一体、10年後、20年後は、どうなっているのか不安もあります。

出席者 (大阪在住の英字新聞記者)

高齢化してきている日本の社会ですが、僕は毎年北海道大学でジャーナリズム・セミナーを開いています。卒業したら自分の国で記者になりたいと言っている外国人留学生が、一番驚いているのは、日本の10代から20代の若者には保守的な考え方の人が多いということです。

同じ年代の欧米人とかオーストラリア、さらにブラジル、トルコの若者は、どちらかと言えば、日本の若者と逆に（思想的には）左のほうについています。

そして彼らに、なぜ記者になりたいかと聞くと、反権力とか、世界のジャスティス（正義）のためで、それが非常に大事だからという答えが返ってきます。

ところが日本の大学生はというと、マスコミ志望の動機について“マスコミは給料が高い”ということ挙げている人が多いという。

メディアを志向している若い人たちについて日本と欧米との比較、森さんはどう見ておられますか。日本の若者は保守的ですね。

森監督 アメリカ大統領選挙で民主党候補のサンダースを応援しているのは大学生とか若い人たちばかりですね。

出席者 45歳以下は民主党候補の左派バーニー・サンダースを応援しています。日本とは真逆なんです。

森監督 これは僕も質問したいくらいです。何だろう。

出席者 サンダースと民主党候補左派のエリザベス・ウォーレンは、医療制度の改革などを訴えています。団塊の世代（1960年～70年代）にサラリーマンであった自分の父親世代は、ちゃんと仕事があって、給料ももらって、病気になったら病院に行って治療を受けられる。そういうことが当たり前だったんですが、今の若い人たちにとってはそれが当たり前じゃなくなっているんです。歯医者に行くと、10万円ぐら

いの治療費をとられてしまう。

だからサンダースとかウォーレンは、どちらかと言えば、アメリカの 50 年代、60 年代のような社会をもう一度復活させようと訴えているのです。彼らが大統領になれば、もっと安定・安心な社会ができるんじゃないかと、若者たちは思っています。ところがお年寄りたちは、それを信用していないんです。

森監督 日本の若い世代が保守化する理由は、そういう辛い境遇にないから、言い換えれば、今とても楽な位置にいるから、革新的な思考にならないということになるんですか。

出席者 いや、分かりませんね。日本の団塊の世代は安全・安心な生き方を何よりも重要視しています。

森監督 日本の団塊の世代は、安全・安心の方向にいつているんですか。

出席者 彼らは、民主主義より、安全・安心の方向ですね。（日本にいる）外国人留学生や外国人記者たちはそういうふうに見ているようです。私を含めてですが、日本社会は極端な方向へのチェンジがこわいんですね。18 歳、19 歳の保守化が進んでいます。

森監督 日本の団塊の世代と言えば、（若い頃）一番過激な政治世代だったはずですが。

出席者 そうなんです、今の団塊の世代は変化を求めなくなっています。

森監督 日本の若い人の特徴は極めてドメスティックなんですよ。

僕は大学のゼミを二つもっていて、それぞれ 20 人ぐらいいます。この 4 年間、君たちどこへ行ったのかと聞くと、20 人のうち、4~5 人が手を挙げて「お父さん、お母さんとグアムに行きました」君たちこの 4 年間、時間があるんだから、例えばバックパッカー一つ持って、東南アジアを放浪するとかしないのかと言ったら、「危ないし、汚いし、なんでしないといけないのですか」（という答えが返ってきました）。なんでと言われたら、こちらも、返す言葉がなくて。

アメリカ、ヨーロッパの大学に行くと、アジア系の学生が結構いますが、ほとんどが中国、韓国の学生ですね、日本の学生はまずいない。留学したがる人ですよ。それでなくても、島国なのに、ここに閉じこもってしまって、先ほど言ったように、馴致能力が高いので、もうこの環境でいいんだみたいな、もしかしたら、そういうのも（保守化の）ひとつの要因かもしれません。

出席者 ところで、情報の津波の時代ですが、こんな状況では、ファクトチェックはできませんね。

森監督 ファクトチェックとかオルターナティブメディアとか、一時、そういう言葉がかなり頻繁に使われるようになって、新聞もファクトチェックの紙面を作ったりしています。

これはワシントンポストもニューヨークタイムズもやっていましたが、そういう形でどんどんやっていくことについては、僕は悪いことではないと思っています。今やメディアが輻輳化して、集積してしまった時代になっているんだから、それは必要でしょう。

トランプ大統領就任の際、ヒラリー（民主党の大統領候補）がISへ資金を供与しているとか、ローマ法王がトランプを応援しているとか、100%ファクトでないものも、結構影響力を持ってしまったという事実もあるので、しっかり仕分けることが大事だと思います。

実は今、メディアリテラシー的なもの、ファクトチェック的なものというのは、うまくいっていないんですよ。その理由は明らかで、これ（ファクトチェック）をやるときには、ファクトとトゥルースといったほうがいいのか。ファクトとフェイクは、別ものだと、みんな思っていたでしょうが、そうではなくて、結構、入り混じっているんです。物事はすべてそうであって、トゥルースとフェイクだけではなくて、人間であれ、現象であれ、世界には、いろんなものが入り混じっているから、そう簡単に、白とか黒とか、右とか左とかに分けられるものではないのに、分けられると思込んでいるんですね。

メディアリテラシーを翻訳する場合、真実を見抜く力とか、テレビの嘘を暴くとか、言う人がいますが、僕は、それは無理だと思うんです。テレビの嘘なんか、暴けないですよ。それで僕は、メディアリテラシーのことを、見抜くではなくて、すべての情報は、誰かの視点にのっとなって出来ているという意識を持ちなさい、と教えています。記事であれば、誰かが書いている。映像であれば、誰かが撮っている、あるいは編集している。それは、その人の視点を通した記事であり、作品なわけです。視点を介さないと、僕たちは情報に接することはできない。つまり絶対誰かを通過している情報なわけで、もちろんそこには、その人の解釈が入ってくるわけです。それ以外の本当のファクトというものはない。

だから名探偵コナンが言っている「真実はいつも一つ」、あれは間違いだと。真実は100通りあると思います。真実は100人おれば、100通りあるんだと言っているんだけど。

だから、ファクトチェックに関して言えば、何かコナン的な「真実は一つ」だから、

この真実を見つけようという発想になってしまって、行き詰まってしまうんじゃないかなと思っています。

【注】ファクトチェック (Fact check)

オルターナティブメディア(Alternative media)

トゥルース(Truth)

フェイク(Fake)

メディアリテラシー(Media literacy)

司会 最後の質問がなければこの辺で、森監督の次回作、ドラマに期待しながら、この「メディア・ウォッチング」の会を閉めたいと思います。
本日は、最近のコロナウイルスについてもコメントなさったりとたいへんお忙しい中、東京からお越しいただきました映画監督の森達也さんでした。
ありがとうございました。